

## 梁曉声の思い描く日本人像(1)

卞 惟 行

### The Japanese image which Liang Xiaosheng imagines (1)

I ko Ben

#### Abstract

Chinese culture spans thousands of years' has a great influence not only on China but also on the neighboring countries. Although the low morality of Chinese people has been pointed out in Japan in recent years and there are publications criticizing that the Chinese bring harm to the whole mankind, in my point of view, the "Standard" and "Morality" that Chinese people consider themselves to possess still exists. In that standard, the Japanese were considered to be "heterodox" and "inferior to Chinese culture".

China didn't acquire the present territory until after the Qing's dynasty. In the past, people's literacy rates were low and cities were enclosed by the rampart. People seldom knew the concept of "country".

When it entered modern ages and the concept of "nation-state" comes out, the "country" named China should be stamped on people's minds, and people were educated by slogans such as "Patriotism" and "All of the 56 races are brothers", and were asked to study the leaders' "Slogan". On the other hand, "The Enemy" is always existed on the back side of "Patriotism".

Present China was substantially capitalist, and because of the importance of sale quantity, publications became more freely widespread as long as they didn't collide with the opinion of the government.

The writer Liang Xiaosheng describes the dark part of China, but he has a common fixed idea as a lot of Chinese people have on Japan when it refers to politics.

はじめに

「愛国」「愛国主義者」などという日本では、ちょっと堅苦しいイメージがあるかもしれない。あまりそれを強調すれば「こいつは右寄りか」などと思われかねない、おそらく、それは戦争が原因であり、軍部によって情報をすべて操作され、兵隊に行かされ、空襲を受け、親族、友人、財産と多くを失った嫌悪感から来ている。

しかし、ところ変われば、その言葉の意味、ニュアンスも違ってきて、お隣の中国では人々はやたら「愛国」を強調しなければならない。国父と呼ばれた孫文は、かつて自らの

地域にある各都市は城壁に囲まれ、多くの民は、その中で暮らし、それぞれの地域で違う言葉を話し、官と民は従属関係にあり、搾取がはびこり、戦乱も多く、信頼できるのは地縁、血縁だけという、処世術を身につけてきた。

華僑であった私は（現在は日本に帰化した）中国の大学で学んだ。特殊な学校で私のような華僑や、香港、マカオの学生が中国本土の学生と学んでいた。学校のカリキュラムで中国本土の学生は必修科目として、「共産党史」を履修しなければならないが、我々は、それとは別に「愛国主義教育」を履修させられた。内容は中国の歴史を学びながら、活字印刷の技術、羅針盤、火薬などがヨーロッパよりどれだけ早く発明され、中華民族はいかに偉大であるかという内容で、香港の学生たちが、「愛国心は教育されるものなのか、中国に学びに来た俺たちの行為こそ愛国じゃないか！」と文句を言っていたのを覚えている。今思えば、中国本土の一方的な価値観だけでなく、他の中華社会の多様な価値観を、身をもって知ることが出来、貴重な体験だった。

このように、中国では、「愛国」は教育されるものであり、それは中国共産党一党独裁の中でテレビドラマ、文学作品の中にも反映されている。

#### 作家梁曉声

かつて毛沢東は「文芸講話」<sup>1</sup>で「我々の文芸は労、農、兵に奉仕すべきだ」という観点を述べ、以降の文学作品の指針となった。21世紀になり、事実上資本主義となった中国で、こんなことを考えて書いている作家、読者はいないと思うが、短期間に高層ビルが立ち並ぶようになり、人々の装いが変わったのとは違い、テレビドラマ、文学作品は、今もって共産党の検閲があり、統治者の意向が反映されるのである。中華人民共和国建国後も、個々の作家は、作品そのものより、政治性が注目された。文化大革命以降も傷痕文学<sup>2</sup>といわれるジャンルが形成されたり、白樺が批判<sup>3</sup>されたりしたことなども、その一例である。中国は伝統的に政治と文学は切っても切り離せない関係にあり、そのようなことも踏まえ、私は梁曉声という作家に着目した。

梁曉声は1949年、ハルビン生まれ、本籍は山東省栄城県、父親は農民から労働者に、母親も農村出身で、1968年より知識青年<sup>4</sup>として北大荒<sup>5</sup>で7年間、農作業、小学校の教員、トラクターの運転手、報道員などに従事、「大自然を愛し、人民を愛し、大地を熱愛する気持ちを育んだ」という。1974年から「工農兵學員」<sup>6</sup>として復旦大学、中国文学科に学ぶ。この時期、一般の大学受験は行われておらず、「成分」<sup>7</sup>など出身や政治的立場、そして所属団体の党幹部の推薦がなければ大学には入れなかった。1977年復旦卒業後、北京映画制作所に配属され八年間勤め、現在は北京語言大学の教授で、政治協商委員<sup>8</sup>である。

1979年から作品を発表し、知識青年としての体験を生かした「今天有暴風雨」「這是一篇神奇的土地」「父親」「雪城」などが有名で、中国国内の文学賞を獲得。また「平民梁曉声」という11編の小説からなる作品集があり、自らを「平民」としている。

中華人民共和国建国と同じ年に生まれ、歴史を共にし、「下放」<sup>9</sup>などの数多くの経験をするが、文革時、多くの人が政治的に迫害されながら、彼はその出身から比較的恵まれた人生を送ってきた。改革開放政策が始まったときに著作活動を始め、その影響力から外国人記者の取材を受け、中国人としてのプライドを誇示するような文章を書き、政治協商委員という立場からも、あたかも中国政府のスポークスマンの発言のようである。彼の作品、エッセイに見られる、価値観、特に日本に対する思いは、一方で「平民」を自認するだけあって多くの中国人の本音をあらわしている。

#### 梁曉声の日本人像

長編小説「浮城」の中で、わずかではあるが、梁曉声の日本観を垣間見ることが出来る。中国沿岸部にある一都市は、突然大陸から切り離され、太平洋上をさまよい出し、人々は慌てふためき、世の終わりを覚悟するが、日本に近づいていることが分かり、金儲けが出来ると喜ぶ人も出てくる、しかし日本はその持てる科学技術を駆使して海岸線に氷の長城を築き、中国人の流入を防ぐ、只、国際的批判をかわすため、ヘリコプターから浮市に救援物資を投下する。その後浮市はアメリカに向かい、日本よりも良いと喜ぶ市民であったが、途中で沈んでしまい、悲劇に終わり、ブッシュは胸をなでおろした。

中国語で、アメリカ留学に必須の TOFEL を「托福」と表記するが、中国人は金儲け、豊かさを求め、国を後にすることに違和感はない、福建省福清市は、古くから華僑の郷として知られている、中国人にとって親族の幸せが一番であり、日本に不法入国し、稼いだ金で地元の家を建てているものも数多くいる。日本への留学、就労は厳しい審査があり、一つの国家として、自国の利益を考えるのは当然であるけれども、一部の日本人は、中国人を見下しており、私自身の体験談として、大学時代用事で広州の日本領事館に行ったのだが、「あんたね！」と横柄な口の利き方をされ、嫌な思いをした。当然、日本人が排他的であると、多くの中国人も感じていたし、梁曉声の小説にも見てとれる。

#### 固定化された対日観

随筆集「95 随想録」に「答X小姐問」、「感覚日本」というふたつのエッセイが収録されている。

「X小姐問」のX嬢は日本人、しかし祖父は満州国の内務大臣で四分の一は中国人の血が流れている。年齢は30過ぎで、台湾で中国語を学び、日本のあるテレビ局の記者として梁曉声の知識青年の時の友人を介し接触を図り、梁曉声は、この「戦友」の面子を立てるため、気が進まないながらも、X嬢の取材を受ける。X嬢は、民族的な優越感に満ちていると梁曉声は感じたようで、最初の質問を遮り、「お招きを光栄とは思いません、逆に自分の貴重な時間を無駄にしているのです。」と不快感を露にする。X嬢は更に「私が思うに我々日本は主観的に言って中国を侵略するつもりはなかった。」「大東亜共栄圏を目指していたのです。抵抗にあったから戦争になってしまったのです。」と梁曉声を不愉快にさせ、

また「私の知っている中国の優秀な青年は日本の植民地になっていれば今日の経済発展を享受出来たと話しています。」「植民地である香港は中国大陸より発展しています。」という趣の話をし、梁曉声は「もし、ひとつの国家が侵略に遭い、まったく抵抗せずに、すぐに投降するのが上策なのですか?」「中国の一般大衆の言葉で言えば、日本軍がひとりの中国人を殺すのは、一匹の虫けらを殺すのと同じだ。これらは、私の母が当時、実際に目にしたものです。」「あなたの思っている、とても優秀な青年たちの言葉は、私も聞いたことがあります。(略)“植民地化は強国富民に有利”、“侵略に反対するのは愚か”、“抗日戦争は失うものあって得るものなし”、の観点を、我々中国人は真剣に反省しなければならないです。」と反論する。

このテレビ局がどこの局で、X嬢なる記者が何者かは分からないが、梁曉声は最初から毛嫌いしていたようであるから、ある程度X嬢の人となりは分かっていたのかもしれない。

“優越感に満ちた様子”や侵略を肯定する発言は、読者の感情を逆なでするのに十分であるし、“優秀な青年”たちに対する「反省しなければならない」は愛国主義教育の必要性を述べているかのようである。

最後のやりとりで、X嬢は、梁曉声に対して、「あなたのように私にはっきりものをいう中国人ははじめてです。」と語り、再会を希望するとともに「多くの中国人が私に与える印象は卑屈で、少なくとも私の前でそのようであり、彼らの表情はまるで別のこと“あなたは金持ちの日本人じゃないですか、私にたくさんの日本円をくれたら、なんでもやらせていただきますよ」と話しているみたいです。」と言うと、梁曉声は「どうぞ信じてください、すべての中国人が日本人の前で、ろくでなしではありませんよ、私はあなたにどれだけお金があっても、あなたのためなんかには働きませんよ。」と返し、ひとつの備忘録になったと締めくくっている。

#### 梁曉声の会った日本人

梁曉声は1995年に日本を訪問している。そのことに関して「感覚日本」に書かれており、日本訪問までに5人の日本人と会っている。

池田寿亀氏、杉本達夫氏は“友好人士”。中国から招聘された翻訳の専門家池田氏は、梁曉声に、うなだれながら「あんなことがなかったらどれだけ良かったか」と侵略のことを話し、空港まで送ってくれた梁曉声に対し、封筒を手渡す。お金だと思った梁曉声は固辞するが、池田氏はどうしても渡し、梁曉声が後で封筒を開けると、中には靴下が入っていた。「日本製の靴下は履きやすい、この点は認めなければいけない。」とよろこぶ。

堀江義人氏と荒井利明氏は、それぞれ朝日新聞、読売新聞の北京支局長で、全国記者協会を通じて梁曉声取材した。結局一度だけの取材で、日本側の興味は中国の国情とそれが日本、特に経済に及ぼす影響であった。ここでも梁曉声は中国人意識を全面に出し、アメリカ人は民主や人権など中国の政治しか興味がない、日本は中国市場の占有率など経済にしか興味がなく、すべて自国の利益しか考えていないと考え、「くそったれ、アメリカ人

の感覚がどうであろうが、日本人の感覚がどうであろうが、中国に対する感覚は12億の中国人が決めるんだ、そのことを無視するのは、季節を知らずに気候を語るようなものだ」と自らの気持ちを記している。

“日本の貧しい家の女の子”は北海道の出身で、自らのアルバイト代で中国留学にやってきた。冬休みに家に帰るお金もなく、知人を通じてアルバイトがしたいと梁曉声を訪ねてくる。あまり器量の良くない娘で、「私は、はじめて、ひとりの中国人の前で自らを貧しいと言う日本人を見た」と語る。梁曉声にとって一番印象に残った日本人だった。

### 梁曉声の感覚

この「感覚日本」が書かれたのは90年代半ば。実際に梁曉声が“日本の貧しい家の女の子”に会ったのはもっと前だから、日本人がエコノミックアニマルなどといわれ、中国と日本の経済、生活水準の差が相当大きかった時代である。梁曉声の全編に貫かれているのは「中国を侵略した日本」である。しかし所々で日本人は金持ちで「優越感」「傲慢」と感じさせる部分がある、この「日本の貧しい家の女の子」が印象に残ったのは、結局、その裏返しで、日本人＝金持ちと思っている証拠である。

私が親の仕事の関係で、中国を訪れた1979年は、改革開放政策当初で、男性も女性もみな、ダブダブの人民服を着ており、物資も少なかった。油や肉などは、「配給制」で、一般の中国人が入れない外国人用のデパートで、親戚のために買いに行ったことを覚えている。自転車、テレビ、冷蔵庫などは、垂涎の的で、それらを日本から持ってきていた私は、親戚からある日、「あんたは優越感があるんだろう」と言われて驚いたことがある。当時、中国語があまりできず、地元の中学校に編入したばかりで、「これから学校でやっていけるのか？」という不安の方が大きくて、とても優越感に浸っていられる状態ではなかったのだ。また担任教師や遠い親戚、知り合ったばかりの人に、今度日本に帰ったら、テレビやラジカセ、腕時計などを買ってきてくれと頼まれた。応じたこともあれば、断ったこともあるが、「物を目的に近づいてきたんだな」と悲しくなった。彼らがそれを要求してくるときによく聞かされたセリフが、「隣の家がそれを持っているから、自分もほしい」とか「このことは他には黙っていてくれ」などである。

「紅眼病」<sup>10</sup>とは、ねたみ病の意味で、80年代の流行語になり、中国なんかにいるより、「豊かな外国で金持ちに」と考える人も多かった。

個人、そして民族の価値観はそれぞれであり、金持ちが、それをひけらかすのは、どこどの国にもあると思うが、現在、一部が豊かになった中国では、それを露骨に表現する。某大手航空会社の北京事務所に勤める私の知人は、排気量の多い高級車に買い換えた、「北京の空気の汚染や交通渋滞を考えると、もっと小さい車でもいいんじゃないか」とたずねる私に、「自分の役職だと小さな車だとバカにされてしまう」と答えた。

煙草を吸う人が日本より多い中国では、敬煙（タバコを勧める）という習慣がある。煙草を吸う時、自分だけが吸うのではなく、相手にも一本勧め、また、初めて会う人にちょ

っとお願いをする時などにも「敬煙」する。高い役職にある人は、よく高級煙草「中華」や「熊貓」を吸っている。「中華」や「熊貓」は一つのステイタスで、それを持っていることで身分を表し、会議や商談などで、一定の地位にある人は、「中華」を相手に差し出すのである。中国人はとにかくブランド好きだ。

日本に対して、「俺たち中国人は」などと一致団結しているような物言いの梁曉声であるが、この人はどう言う「階級」で、どう言う煙草を吸っているのだろうか？

## 日本訪問

梁曉声は三つの敗戦国の中で、「イタリアは国民自らがムッソリーニを処刑し、敗戦を悟ったドイツもヒトラーを処刑しようと企てるものがいたし、軍と人民の心は離れていた。日本だけが原爆が落ちるまで天皇、軍、国民に至るまで、投降する意思などまったくなく、結局無様な敗戦を喫したのだ、とし“原子爆弾はアメリカが製造し、投下し、その威力によって死んだのは日本人である、それは彼らの死は日本自身が招いたもので、自業自得である。この論理は「第二次世界大戦」の正しい歴史観とも合致する。しかし日本人の民族感情と合致することは、どれだけ難しいことであろう。何せ、死者の中に自らの親族、友人がいるのだから」と、日本軍国主義と日本人は別というが、結局日本人が悪いのだ」と決め付けている。

梁曉声をはじめとする中国映画関係者の代表団は、日本を訪問し、日本側の開くレセプションに参加する。日本の映画関係者には、山内久氏、新藤兼人氏、中西隆三氏らがいた。

中西隆三氏との会話では、「原子爆弾によって24万の広島、長崎市民が死んだ。この数字は正確無比で、戸籍謄本や写真と照らし合わせた。中国人学者の南京大虐殺の死者数がまちまちだ、このことは、私は戦争を肯定しているのではなく、中国のために残念だ」という中西氏に対し、梁曉声は、「中国の代表団の中で、私以外誰もまともに南京大虐殺の史料を読んだものはいなかった。私は、“我々は確かに正確な数字を軽んじてしまった。しかし日本人は八年間の侵略で3000万～4000万の中国人を殺しているんです！南京大虐殺で死んだのが20万、30万などというのが日本と日本人にとって特別な意味はあるのですか」と答えた」と語り、ここでもスポークスマンの役割を果たしている。

梁曉声は、この「感覚日本」の中で日本人を何通りかに分類して、三番目に属するものを「愚かで、自らを賢いと思っている政客及び一部分の民族主義者、新たな軍国主義者、ファシズムで、右翼勢力を形成している。このような輩は一部分でやつらの行いは、幸い、まだ中国人民を激怒させるには至っていない」、「やつらの身勝手さは、今日、中国という一頭の獅子を激怒させるに等しい。やつらはまったく分かっていない、中国人民がいったん怒りをもって日本に対すれば、日本はアジア、世界の中で明るい未来はないのだ」と「中国人民」の声を代弁している。

しかし感情に走るだけでは、自国の正当性は主張できない、きっちりとした証拠があってこそ、国際社会を完全に味方につけ、梁曉声が嫌う三番目に属する日本人を黙らせるこ

とができるのではないか。後の賠償問題などにも関連することでもあり、３０００万～４０００万の１０００万という大きな隔たりがあること自体、結局のところ中国政府が自国民を守れなかったことを示しているのではないか。

#### 中国人の処世術

近代に入り国民国家の概念が出来ると、「国家」を人民に刷り込むことが必要になる。これは中国に限ったことではないが、何せ、広大な領土と多くの民を有する「国」である。「愛国」「５６の民族はみな兄弟」などの標語で教育し、今もって指導者の「スローガン」を人民に学習させなければならず、一方「愛国」の裏には必ず「敵」が必要なのである。

中華人民共和国になり、社会主義になって、「解放」されても、資本家、地主の財産を没収し、「労働者階級がすべてを指導する」などのスローガンが踊り、文化大革命の時は「階級の敵」として「元資本家」「元地主」「華僑」「教師」「元国民党」とその親族は徹底的に弾圧された。結局、文化大革命は收拾がつかなくなり、私怨の連鎖になってしまった。

「反日教育」は９０年代半ばから、と言われているが、「愛国」を鮮明にするのに、日本はちょうど都合が良く、文化大革命時の「労働者階級」が中国で、「階級の敵」が日本のようである。

現在のチベット騒乱で、中国側は「ダライ・ラマー派」が扇動したものだ、と決め付けているが、高度に通信の発達した今日、国際社会から非難を浴びている。それでも「西側の報道はでたらめ」とか「中国の内政問題」とし、すべて自らが正しいと言い張る。このようなやり口は、輸出品で問題になっている餃子やおもちゃでも同様に、相手に被害が出ても、すべて相手に非があると言う。

同じ「皇帝」の下でも過酷な統治が行われ、他の価値観は絶対に認められない。とにかく自らの「正統史観」を教育し、人民の側もことあるごとに「愛国」を強調する。

私には台湾と中国本土に「元国民党」の親戚がいた。二人とも、もうこの世の人ではないが、台湾の親戚はまずまず幸せな生活を送り、中国本土や台湾の政治を批判したり、自由に話をした。中国本土の「元国民党」の親戚は複雑な経歴の人だが、年をとってからは老人ホームに入り、春節前になるとテレビ局が取材に来て、「共産党はすばらしい」「共産党のおかげだ」と繰り返し、地元の放送局でプロパガンダのように流された。

梁曉声は満州貴族の血を受け継ぐX嬢に出会ったとき、「彼女が望む、望まぬにかかわらず、彼女に刻まれた中国の特殊な歴史を感じずには入られない。もしも幼少期、青春時代を中国で過ごしていたなら、疑うまでもなく、体に刻まれた歴史のために、多くの災難と過酷な運命にさらされていたであろう」と感じている。

日本との関係においては、民族感情が先立つが、国内問題に絞ってみれば梁行声も、その非人間性の部分は良く分かっているはずである。

私の父やその親族は中国の過酷な歴史に弄ばれた。外国にバカにされたくないのなら、是非、私利私欲に走らず団結してほしいものである。

注釈

<sup>1</sup> 日本では一般に「文芸講話」と呼ばれる（中国の通称は「延安講話」）。革命根拠地・延安の整風運動の重要な一環として42年5月に開催された文芸問題に関するシンポジウム（参加者100人近く）における毛沢東の講話。

<sup>2</sup> 文化大革命が人々、特に青少年の心に残した精神的傷痕を描いた文学作品を言う。

<sup>3</sup> 作家、白樺が79年に発表した「苦恋」をもとに制作された映画「太陽和人（太陽と人）」に対し、81年4月には軍機関紙「解放軍報」が映画のシナリオを攻撃するなど批判が続いたが、11月に白樺が自己批判して事件は終息した。

<sup>4</sup> 初級中学（中学）以上、高級中学（高校）卒業までの教育を受けた青年男女。主として文化大革命中の用語で、毛沢東の呼びかけに答え、多くの若者が農山村に入ったが、彼らは“知青”と総称された。

<sup>5</sup> 以前は広大な荒地だった。中華人民共和国建国後、開拓されて、小麦、大豆などが収穫され、文化大革命時には多くの青年が赴かされている。

<sup>6</sup> 文化大革命時、全国の高等教育機関は学生募集を停止していたが、70年に募集を再開。新入生は工場、農場、解放軍から派遣され、従来の学生と区別され、「工農兵學員」と呼ばれる。文革終了後の77年に全国統一試験が復活し、「工農兵學員」はなくなった。

<sup>7</sup> （主として中華人民共和国建国前の）本人自身の履歴、職歴など階級区分。

<sup>8</sup> 中国人民政治協商會議は、共産党、各民主党派、各人民団体、各界代表で構成される統一戦線組織。全国委員会のほかに、地方レベルも委員会が設けられている。

<sup>9</sup> 幹部や知識分子が地方農山村へ行くこと。

<sup>10</sup> 目を赤くして、目を血走らせて、ねたむ。

引用文献

1、「浮城」 梁曉声 花城出版社 1992年

2、「95随想録」 梁曉声 新疆人民出版社 1996年

3、「原典で読む図説 中国20世紀文学」 中国文芸研究会編 白帝社 1995年

（平成20年3月31日受理）